

大 県 遺 跡

— 市道大県6号線建設に伴う —

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 2—Ⅲ

1983年 3月

柏原市教育委員会

は し が き

柏原市の平野・大県・大平寺・安堂一帯の東山地域は古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての時期に河内の中枢部であったことから、古墳、寺院跡、官衙跡、集落跡等多数の重要な遺跡が存在する。

今回の調査の結果、鎌倉～室町時代に埋没した開析谷が明らかになり、多量の遺物が出土した。また、調査区周辺に中世集落址が存在していたと考えられる。

道路建設が周辺地域に与える影響は大なるものがあり、今後、東山をどう利用するかという問題も含め、地域開発と埋蔵文化財の保存、活用をどう一体化していくかが課題となろう。

また大県6号線の調査については、関係者並び地元の方々に御協力いただいた。これを機会により一層文化財保護への御理解と御協力を得たいと考えている。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和55、56、57年度に実施した市道大泉6号線建設に伴う事前緊急発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、花田勝広を担当者として下記のように三年度にわたって実施した。
第一次調査 昭和56年3月16日～3月31日 (55年度)
第二次調査 昭和57年1月12日～2月9日 (56年度)
第三次調査 昭和57年8月6日～8月12日、11月1日～11月8日 (57年度)
3. 実測図中に方位は、磁北、標高はT・Pである。土器の形態の特徴や技法は、観察表に示した。
4. 今回の発掘調査、遺物整理について、下記の諸氏の協力を得た。記して謝意を表する。

北野 重、安村俊史、広岡 勉

麻 栄三郎、朝田行雄、井上岩次郎、奥野 清、川端長三郎

岸本重夫、玉野正一、西岡武重、分才春信、道狭甚蔵、森口喜信

山田貞一、山本芳一、井宮好彦、上条裕典、坂井利和、佐藤 尚

藤沼敏則、山下祐司、山中 茂、石田成年

大塚淳子、西原清美、松田光代、山内 都、荻野絹子、松岡由紀子

竹下影子、竹下典江、蜂谷直子、藤岡弘子、大谷麻弓、及一敏恵

松成早苗、村口ゆき子

(敬称略)

目 次

はしがき

例 言

1. 調査に至る経過	1頁
2. 調査概要	3頁
3. ま と め	5頁

挿 図

図一 1 東播系の須恵器の鉢

図版 7 第 1 調査区出土瓦実測図

図一 2 第 2 調査区 遺構図

図版 8 第 1・2 調査区

図 版

図版 9 第 1・2 調査区

図版 1 調査位置図

図版 10 第 2・3 調査区

図版 2 調査区図

図版 11 第 5・6・7 調査区

図版 3 第 1 調査区遺構図

図版 12 遺物写真

図版 4 第 1 調査区出土土器実測図

土器観察表

図版 5 第 1 調査区出土土器実測図

図版 6 第 1・3 調査区出土土器実測図

1. 調査に至る経過

1. 調査に至る経過

柏原市建設部土木課は鐔比古神社参道の石階段下より、南へ延長し、皿池農道に連続する市道大県6号線（実効幅員4m、延長約300m）の建設を計画した。

この計画は昭和55年度を初年度とする7ケ年にわたる継続事業である。

道路建設予定地は生駒山地西麓の標高約40mの地点を南北に延びるもので、平尾山古墳群の最西端部、大県遺跡・大県南遺跡の最東端部と目される周知の遺跡内であるため、担当課である土木課は文化財保護法、第57条の3に基づき、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書」を昭和56年2月25日付で提出し、これを受けて、柏原市教育委員会は土木課と発掘調査について協議にはいり、年次計画を追って、事前に発掘調査を実施して行くこととなったものである。

第一次調査は昭和56年3月に道路建設工事と並行であったために、発掘調査区は建設予定地の一部にトレンチを設定したのみでしかなかったが、鎌倉期を中心とする遺物が堆積する池状のおちこみ遺構の遺存が知られた。よって、第二次調査からは予定地全面を発掘調査することの必要を認めた。土木課も、この発掘調査結果の事実をもとに、第二次調査以降については発掘調査費を予算化してゆくこととなった。第二次調査（昭和56年度）は土木課の予算として調査費360万円を計上して、発掘調査を実施した。第三次調査（昭和57年度）は教育委員会の予算として調査費499万円を計上して、発掘調査を実施した。

上記のように、年次に従って、次第に調査の主体性が教育委員会に移行していることが知られるが、これは、関係各位による、ご理解とご支援の賜物であることを記して謝意に換えるものである。

柏原市建設部土木課、市道大県6号線建設担当、古川佳昭、田中清一郎及び土地所有者各位には、調査期間、調査行程等について、ご協力いただいた。

2. 調査の経過

調査地は、鐔比古、鐔比壳神社の鎮座する東山丘陵の西斜面で標高40mを測る。地目は、畑地で戦前まで民家が立っており、このために遺跡の大部分が削平を受けている。

昭和56年度は、第一次調査の結果に基づいて、鎌倉時代の遺物を出土する部分に第1調査区（6×20m）、その南に第2調査区（3×13m）、第3調査区（5×4m）を設定し、遺構の有無について確認を実施した。その結果、第1・3調査区で遺構や遺物が確認されたため、この2ヶ所を中心に調査を行った。また、第3調査区の南側で試掘坑を設定したところ、地下水の湧水がはげしく西側の民家に接する高さ2.5mの石垣の崩壊を誘発する恐れがあるため、掘削

を中止せざるをえなかった。

第三次調査は、丹波宅の南側50m部分で、北側より第4調査区(2×2m)、第5調査区(1×6m)、第6調査区(15×10m)、南端に第7調査区を設定し、調査を実施した。第6調査区は、調査着手予定の8月12日の時点でブドウの収穫が終了しておらず、ブドウの棚の撤去がなされた11月1日～8日の間で調査を実施した。

調査地は、ほとんど斜面地である。谷筋にあたる部分にも民家が存在し、地盤のもろい土壌なので、第3調査区南側、第4調査区、第6調査区において、当初計画(6×50m)の調査面積を縮小せざるをえなかった。

2. 調査概要

1. 第1調査区の概要

遺構

現地表下、50～90cmで黄褐色土の地山層。ほとんどが現代の溝・竪穴で攪乱されている。

調査区北端は、地山が中央部より2.3m下っており、開析谷となっている。開析谷は、西へ開口しており、その斜面には遺構は検出されなかった。

開析谷の堆積土は、下層より青灰色砂質土・淡茶褐色土・暗茶褐色土の順である。遺物は、谷の北斜面で多量に出土した。遺物の出土層位は、最下層の青灰色砂質土からで、須恵器（1～17・76・77）、土師器（19～30・32～42・51・52・55・56）、瓦器（43～45）、瓦質土器（57～67・69～75）、瓦（86）が出土した。他に、上層の淡茶褐色土（31）や暗茶褐色土から少量出土した。開析谷より上層は、現代に攪乱されているが、若干の遺物が淡茶褐色砂質土（46・47～50・53・54・61・68・87～95）に認められる。出土遺物より、開析谷の埋没完了する時期は、15世紀～16世紀頃と考えられる。また、青灰色砂質土には、古墳～室町時代のものが混在している。

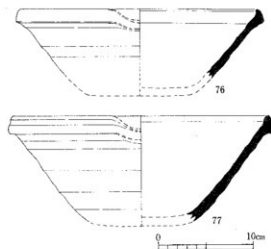


図-1 東播系の須恵器の鉢

遺物

出土遺物は、土器・瓦・石製品があり、コンテナ36箱ある。最も多く出土したのは土器でコンテナ20箱ある。遺物は、開析谷から最も多く出土しており、順をおって遺構・遺物ごとに記述する。

(1) 開析谷内

土器は、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器等があり、古墳時代後期～室町時代のものが混在する。須恵器の器種

は、杯（1～3・6・9）、甕（4・5・7・8）、すり鉢（10）、高杯（12）、壺（11・13・15）、横瓶（14）、鉢（17・76・77）、甕（16）がある。土師器の器種は、高杯（21～23）小型高杯（19・20）、甕（24・25・27）、鉢（26）、皿（28～42）、羽釜（55・56）、鍋（51・52）がある。瓦器は椀（43～45）がある。瓦質土器は、羽釜（57～67）、鉢（69～75）などの器種がある。

(2) 包含層

器種は、瓦質土器の羽釜（61・68）、陶器の鉢（46～48）、壺（53）、甕（54）がある。また、軒

丸・軒平・丸瓦（87～95）が、淡茶褐色砂質土から出土している。

軒丸瓦は、巴文で直径15.5cmのもの（88・89）と直径13.5cmのもの（87）があり、共に焼成は瓦質である。（89）は、中央に巴文があり、外区に16個の珠文を配し平縁である。（87）は内区に右回りの巴文、外区に珠文を配す。巴の頭は、大きく鎌型をなし尾は、細長い。

軒平瓦は、文様と形態から2種類が認められる。内区に連なる珠文を配し、周縁が広く高いもので顎の形は段顎であり、平瓦に瓦当部を補う手法のもの（93）と、唐草文で中心飾は、菱文で左右に1葉蕨手を3回反転するもの（90・91・94）である。瓦類の時期は、室町時代以降のものと考えられる。

遺物の時期は、各時期のものがあり、古墳時代後期（6世紀末）のもの（1～3・12・16・22・23）、飛鳥時代（7世紀）のもの（4～7・19～21・24～27）、奈良時代のもの（8・9）、平安時代のもの（18）、さらに鎌倉～室町時代のもの（28～85）がある。また、愛知県佐投窯産の灰釉陶器の皿（18）や兵庫県明石市魚住古窯址群出土品に類似した東播系の須恵器の鉢（76・77）も含まれる。

遺 構

第2調査区（39mf）・（図-3）

現地表下、20cmで黄褐色土の地山層となる。第1調査区と同様に後世の削平を受けている。

遺構は、調査区南端の石組み遺構のみである。石組み遺構は、コ字型に2段に石を横積みにし、底面に石を敷く。石組みに付属する溝は、幅15cm、深さ10cmを測る。石材は、花崗岩。

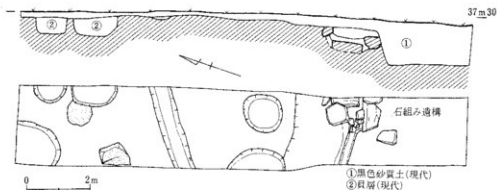


図-2 第2調査区遺構図

3. 第3調査区の概要

遺 構

層序は、盛土・耕土・灰褐色砂質土・緑灰色砂質土・暗緑灰色粘質土の順で堆積している。遺構面は、緑灰色粘質土上面で溝と土拵を検出した。溝は、幅40cm、長さ3mで灰褐色砂質土

が堆積する。土披は、幅1m、長さ2.5mで淡灰褐色土が埋土層である。遺構の時期は、出土した瓦質土器から、共に14～15世紀頃と考えられる。遺物は、灰褐色砂質土(78-85)と緑灰色粘質土から、多量の須恵器・土師器・瓦質土器が出土した。

遺物

器種は、土師器の鍋(78)、羽釜(79)、甕(85)、瓦質土器の羽釜(80・81)、鉢(82・83・84)がある。時期は、室町時代と考えられる。

4. 第4・5・6・7調査区

遺構

第4・5調査区は、現地表下、20cmで灰褐色砂質土の無遺物層となる。両調査区共に、畑地の開墾のため、削平が著しく遺構・遺物は検出できなかった。

第6調査区の層序は、上層より耕土・淡茶灰色砂質土・茶灰色砂質土・淡青灰色砂質土の順で堆積している。遺構は検出されなかったが、少量の土師器(鍋・杯)と須恵器が、最下層の淡青灰色砂質土内で検出された。調査区は立地上、開析谷3の中央部にあたる。

第7調査区は、現地表下、20cmで明褐色土の地山層となり、南より北に向かって傾斜する。開析谷3の南部にあたるが遺物は出土しなかった。

3. ま と め

今回の調査では、古墳時代後期から室町時代にかけての遺物を内包する開析谷を3ヶ所、確認した。北側より順をおって、旧地形を復元すると開析谷1は、第1調査区北側に位置する。開析谷2は、第2調査区南端で北肩部を確認したが、南肩部は未確認である。しかし、第4調査区は、地表下20cmで地山層に達していることから、南肩部はこれより北側に位置すると思われる。開析谷3は、北肩部を現地地形上から判断して、第6調査区北側と考えられる。南肩部は第7調査区で検出した。また、開析谷より鎌倉から室町時代の遺物が多く出土することは、尾根上に住居址などの遺構が存在していたことを示唆するものである。

出土貴物は、これらの時期のもの以外に5世紀から7世紀のものも多く認められ、周辺に古墳が存在する可能性がある。特に飛鳥時代(7世紀)の小型高杯(19)や軒瓦(86)が出土していることから、集落に伴う墓址群の存在を示唆するものと考えられる。

土器観察表

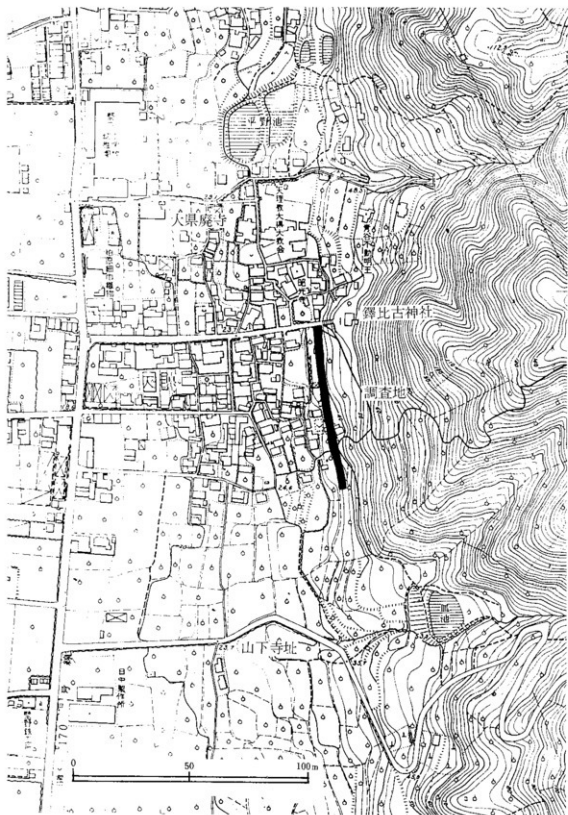
出土地点・土層	番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調・肌・胎土・備考
第1調査区 開折谷 青灰色砂質土	1 3	須恵器 杯身	立ちあがり直立し短いもの1・2と内傾しやや長いもの3がある。受部はつまみ出し、水平。	底部は時計回りの回転ヘラケズリ。	・灰白色～暗灰色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	4 5 7	須恵器 蓋	宝珠つまみをもち、かえりがある。端部はシャープ。4は蓋蓋。	4は天井部に時計回りのカキ目。5・7は時計回りの回転ヘラケズリ。	・暗青灰色 ・良好 ・2mm以内の砂粒多く含む
	6	須恵器 杯	口径9cm、器高4cmの小型の杯。I線端部は丸くあまい。	底部はヘラ切り。	・灰褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	8	須恵器 蓋	I径16.4cm。かえりをもたない。	天井部は回転ヘラケズリ。	・灰白色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	9	須恵器 杯	高台付きの杯。体部は外反する。高台の断面台形。	底部は回転ヘラケズリ。	・暗灰色 ・良好 ・3mm以内の石英長石多く含む
	10	須恵器 すり鉢	底部に円盤の痕跡が残る。		・灰褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	11	須恵器 壺	頸部が直立し、口縁部が外反する長頸壺のI線部	内外面回転ナデ。内面にしぼり目が残る。	・黒灰色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	12	須恵器 高杯	杯部外面に一条の凹線文をめぐらす。脚部つけ根に円形のスカシ孔あり。	杯部底部外面逆時計回りの回転ヘラケズリ。他は内外面回転ナデ。	・暗灰色 ・良好 ・3mm以内の石英長石多く含む
	13 15	須恵器 壺	広口壺のI線部。13は頸部外面に2条の沈線と波状文を施し、I線端部はシャープ。15は口径17cmを測る。I線端部は丸くおさめる。	内外面回転ナデ。15は外面にカキ目を施す。	・灰色 ・良好 ・1mm以内の砂粒を含む。
	16	須恵器 壺	「く」字状に頸部が外反し、口縁端部を内方へつまみ上げる。	体部外面は平行削き。内面は青海波の叩き目。口縁部内外面回転ナデ。	・青灰色 ・良好 ・2mm以内の砂粒を含む。
	17	須恵器 鉢	上端部が平坦なI線部に、内湾する体部をもつ。	内外面回転ナデ。	・灰褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	18	灰雑陶器	断面二日月状の高台を有す。	底部は逆時計回りのケズリ。	・灰白色 ・良好 ・砂粒含まず
	19 20	土師器 小型高杯	19は口径9cmの皿状の杯部を有する。20は脚部のみ。	20の外面は指押エ。	・明黄灰色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	21 23	土師器 高杯	21は碗形の杯部を有し脚部は直立し、極開き。22は複合する杯部。23は21と同様の脚部。	21の杯部内面はヨコ方向のハケ目、外面は指押エ。脚部内面指押エ。22は外面ヘラミガキ、内面ナデ。	・明黄褐色 ・良好 ・2mm以内のクサリ礫を含む

出土地点・土層	番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土・備考
第1調査区 開析谷 青灰色砂質土 ※31は淡茶褐色 土から出土	24 ・ 25 ・ 27	土師器 甕	外反する口縁部をもち 口縁端部をつまみ上げる もの(24・27)と面をな すもの(25)がある。	25・27は外面にタテ方 向のハケ目、内面はヨコ 方向のハケ目(25)とヨ コ方向のハケ目を押消す (27)がある。	・灰白色～明灰色 ・良好 ・3mm以内の砂粒 含む
	28 ・ 34	土師器 皿	外上方へ伸びる口縁部 を有し、口縁端部を丸く おさめる。	内外面ナデ。	・灰色 ・良好 ・砂粒含まず
	35 ・ 37 ・ 40	土師器 皿	底部が凹み、体部に明 瞭な屈曲部をもつ	内外面ナデ。底部指押 エ。	・灰白色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	38 ・ 39	土師器 皿	丸底から内湾気味に口 縁部がつづく。口縁端部 は丸くおさめる。	底部は指押エ。口縁部 外面、内面はナデ。	・明灰褐色 ・良好 ・砂粒含まず
	41	土師器 皿	口縁部が大きく外方へ ひろがる皿である。	内外面ナデ。	・灰色 ・良好 ・砂粒含まず
	43 ・ 45	瓦器 椀	断面三角形の高台を有 する(44)。口縁端部は内 傾する。	外面は指押エの後ヨコ 方向のヘラミガキ。内面 はヨコ方向のヘラミガキ の後格子目状暗文を施す。	・黒褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
第1調査区 淡茶褐色砂質 土	46 ・ 47	陶器 鉢	46は片口鉢で口縁外端 面に凹線を施す。47は体 部破片。	内外面ナデ。47は内面 にオロシ目あり。	・明茶褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず ・備前焼
	48	陶器 鉢	口径22cm。小さい底部 をもつ。	外面下半にヘラケズリ 内面及び外面口縁部に軸 を施す。	・明茶褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	49	瓦質土器 壺	高台の付く壺の底部。	内外面ナデ。	・黒褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	50	陶器 壺	底部から直立した体部 がつづく。	内外面ナデ。鉄軸を施 す。	・茶褐色 ・良好
	51	土師器 鉢	口径32cmの浅い鉢で、 皿状の底部から口縁部が 直立する。	底部外面はヘラケズリ 他は内外面ナデ。	・褐色 ・良好 ・3mm以内のクサ リ礫含む ・2次焼成痕あり
	52	土師器 鉢	口縁端部を外反させ、 体部最大径に鈔をもつ。	内外面ナデ。	・褐色 ・良好 ・3mm以内のクサ リ礫含む ・2次焼成痕あり
	53	陶器 壺	口縁部が大きく外反し 口縁端部を下方に拡張さ せる。	内外面ナデ。	・茶褐色 ・良好 ・砂粒含まず
	54	陶器 壺	口縁部は水平に折れ、 口縁端部を上下方に拡張 させる。最大径を体部中 央より下方にもち、やや 下脹れである。	体部外面は荒い左上り のハケ目を施した後ナデ 消す。内面はナデを行っ ているが、粘土織の痕跡 が残る。	・淡茶褐色 ・良好 ・3mm以内の長石 石英多く含む ・常清焼

出土地点・土層	番号	器種	形態の特徴	技法の特徴	・色調・構成・胎土・備考
第1調査区 開析谷 青灰色砂質土	55 ・ 56	土師器 羽釜	形態を復元出来るものがないが、口縁端部を内傾させるもの(55)と、端部をさらに折り返すもの(56)がある。	内外面ヨコナデ。	・黄褐色～明黄褐色 ・良好 ・殆ど砂粒含まず
	※61・68は淡茶褐色砂質土から出土	瓦質土器 羽釜	口径が16～20cmの小型のもの(57～59)、20～26cmの中型のもの(60～64・80・81)30cm以上の大型のもの(66～68)がある。口縁部外面に3条の凹線文をめぐらせるものが多い。	粘土紐の巻き上げにより成形。鋳貼り付け後にヨコヘラケズリ。体部外面は時計回りの回転ヘラケズリ。底部は不定方向のヘラケズリ。内面はヨコハケを施すもの(60・63～68)とナデ済みの(58・59・62)がある。	・黒色 ・2mm以内の石英長石を含む ・焼成時に炭素が吸着していない土師質のものもある。
第3調査区 溝 灰褐色砂質土	80 ・ 81	土師器 鉢	口縁部2方に把手をもつ鍋。	外面体部下平ヘラケズリ。他は内外面ナデ。	・橙色 ・良好 ・砂粒含まず ・2次焼成痕あり
	78	土師器 鍋	口縁部が水平に折れ、口縁端部は上方に肥厚する。	内外面ナデ。	・明灰色 ・良好 ・1mm以内の石英長石を含む ・外面にスス附着
	79	土師器 羽釜	小さい底部から外方へ体部が直線的に伸びる。口縁端部は上方へつまみ上げるものと、下方へ肥厚させるものがある。74は端面に凹線文を施す。73は体部がやや内湾し口縁端部は丸くおさめる。	粘土紐の巻き上げの後ロクロで成形しナデ調整を行う。外面は体部上半から底部へ向ってヘラケズリ。内面は左上りのヨコハケの後、底部から口縁部へ荒いオロシ目を通す。	・黒色 ・良好 ・2mm以内の石英長石を多く含む
※69～75は第1調査区開析谷青灰色砂質土から出土。	69 ・ 75 ・ 82 ・ 84	瓦質土器 鉢	口縁端部を上方に肥厚させ、端面に一条の凹線文を施すもの(77)がある。	粘土紐巻き上げの後ロクロで成形。	・灰褐色 ・良好 ・3mm以内の石英長石を含む ・内面に使用痕有
第1調査区 開析谷 青灰色砂質土	76 ・ 77	須恵器 鉢	短く直立する頸部から口縁部を叩き出してつくる。	外面は左上りの叩き目内面は左上りのハケ目。	・赤褐色 ・良好 ・2mm以内のクサリ礫を含む
第3調査区 溝 灰褐色砂質土	85	土師器 甕			

版 图

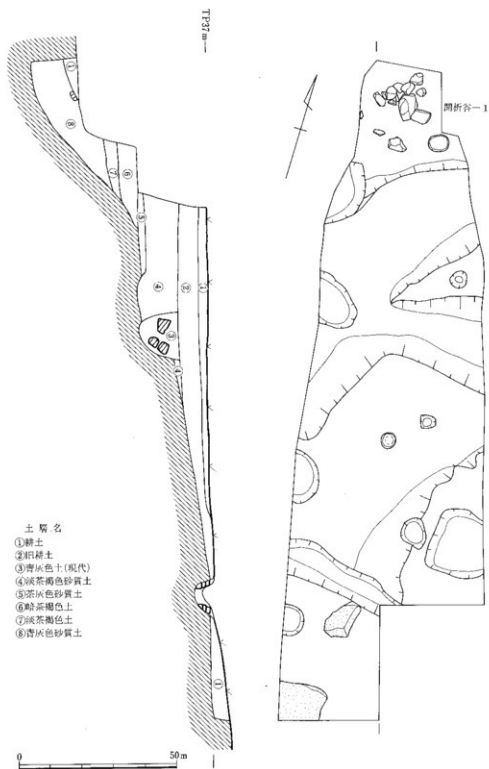
図版1 調査位置図

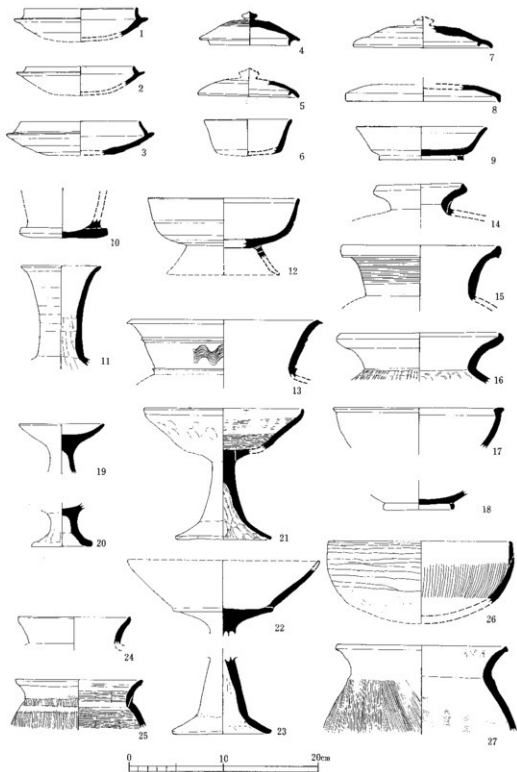


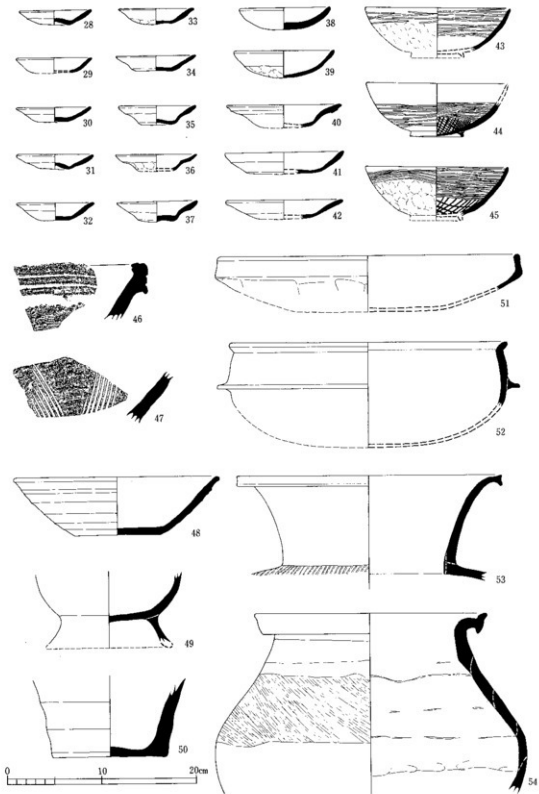


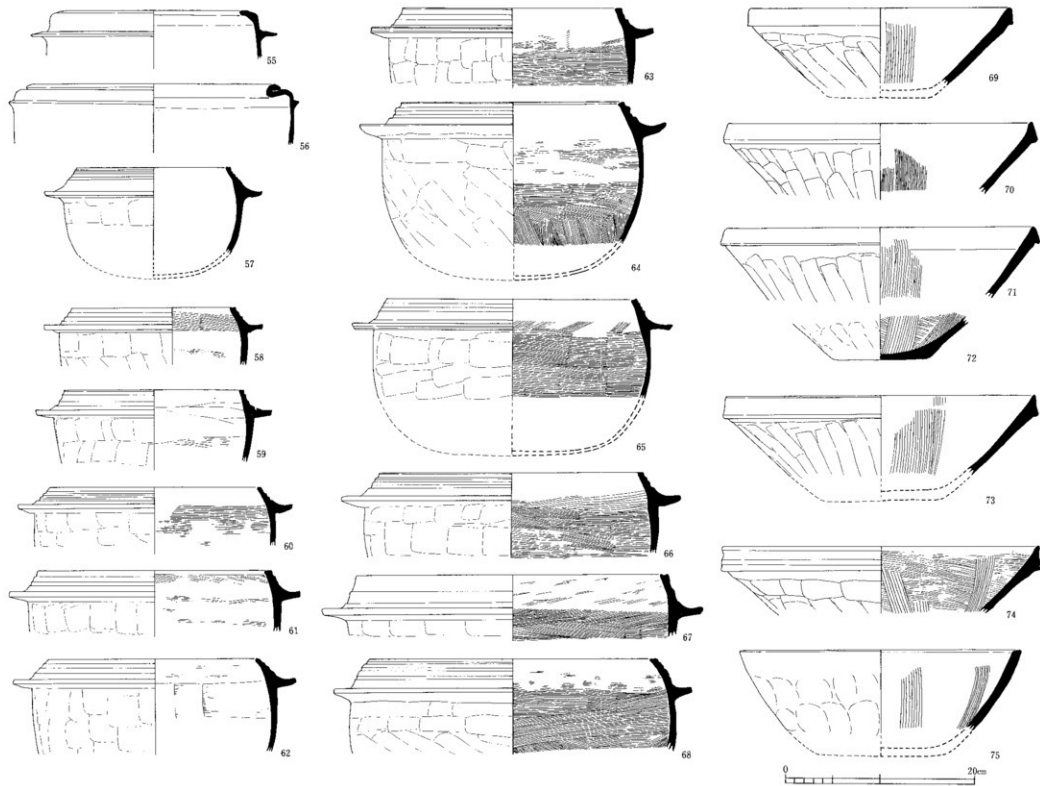
56年度調査区
57年度調査区

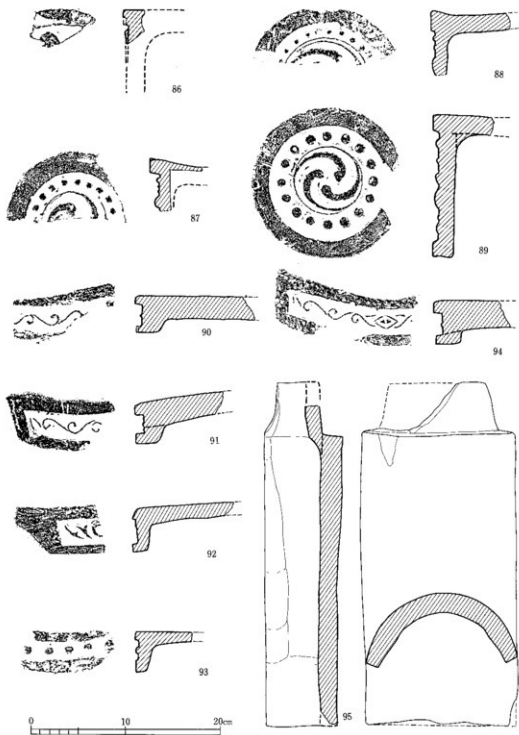


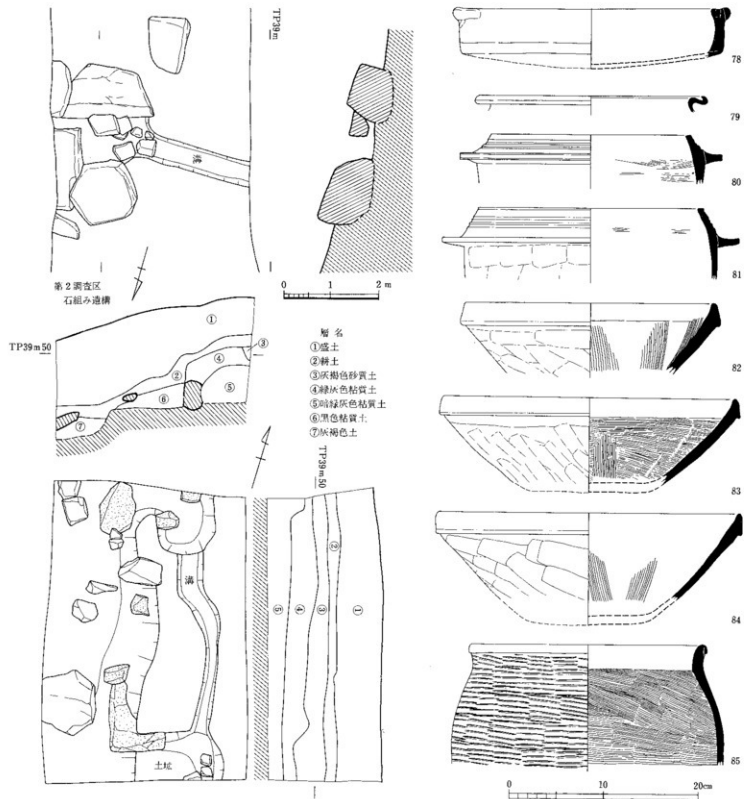


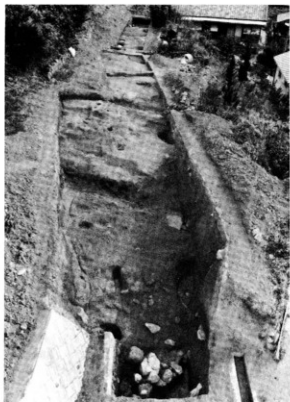




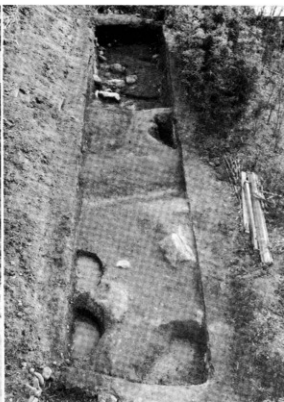








第1調査区全景



第2調査区全景



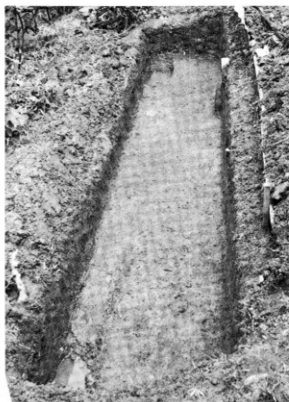
第1調査区 開析谷-1



第 2 調査区 石組み遺構



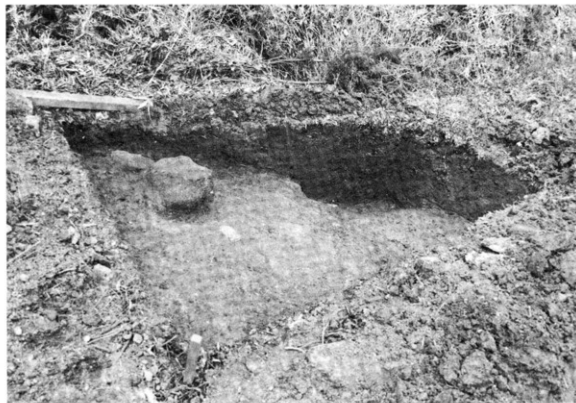
第 3 調査区全景



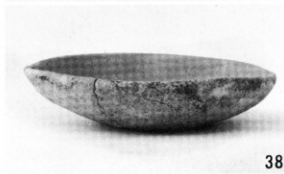
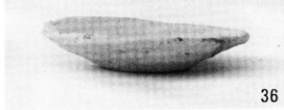
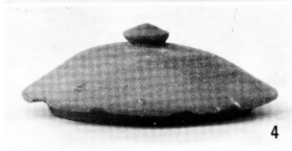
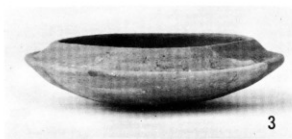
第 5 調査区全景



第 6 調査区全景



第 7 調査区全景



大 泉 遺 跡

—市道大泉6号線建設に伴う—

柏原市埋蔵文化財調査概報

編集・発行 柏原市教育委員会
〒532 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 0729(72)1501 内716

発行年月日 昭和58年3月31日

印刷 K.K. 中島弘文堂印刷所
柏原市古文化研究所

